

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

セ ン タ ー 通 信

第 15 号
2021. 3. 30

建築史・都市史的視点からみた

旧江戸川乱歩邸

石 樽 督 和

二〇二〇年秋から立教大学人文研究センター共同研究プロジェクト「人文学資料の情報メディア化に関する新たな手法開発と適用」（研究代表者：野中健一）の一環として、旧江戸川乱歩邸を3Dスキャンしデジタル空間として再現するとともに、建築史・都市史的視点から建物の調査を行うこととなった。私は建築史・都市史を専門として、これまで池袋の都市史研究を行ってきたことから、今回研究代表者の野中健一先生にお声がけいただき、後者の調査を担当することとなった。

調査は二〇二一年度も継続的に行う予定だが、ここでは調査の視点と二〇二〇年一月から一二月にかけて行った洋館と主屋の実測調査について簡単に紹介をしたい。調査には私のほか建

築史・都市史を専門とする法政大学の金谷匡高さんと文化財工学研究所の砂川晴彦さんにも参加いただいたいて、三名で行っている。

ここで改めて紹介するまでもないと思うが、豊島区池袋の立教大学キャンパス北側に隣接して旧江戸川乱歩邸（以下、乱歩邸とする）が建っている。江戸川乱歩（本名：平井太郎）は引越し魔として知られており、生涯で四六回引越し四七軒の家に住んだ。そして記録魔でもあった乱歩自身は、その四七軒の家の間取りすべてを方眼紙に描き、『貼雑年譜』に残している（『貼雑年譜』とは乱歩自身が日記、イラスト、写真、手紙、生原稿、メモ書き、新聞雑誌の切抜き、チラシやパンフレット、自著の新聞広告などで編みあげた年譜

目 次

建築史・都市史的視点からみた旧江戸川乱歩邸

石 樽 督 和

メディアと人によって「つくられる」怪異

―「日本の怪異―その発生と展開について」講演会感想―

八 卷 詩 子

資料紹介

「立教探訪」撮影の裏側

乱歩の土蔵で眠っていた鳥羽造船所の蔵書

杉 本 佳 奈

江戸川乱歩書き入れ旧蔵書

宮 本 祐 希

William Irish. *Deadline at dawn* (ウィリアム・アイリッシュ『暁の死線』)

米 山 大 樹

旅する乱歩―別府編―

丹 羽 み さ と

展示紹介

捕物帳の作家たち―捕物作家クラブ展

影 山 亮 / 丹 羽 み さ と

編集後記

であり、乱歩の作家としての記録と乱歩とその家族の生活史を伝える狂気の記録である。乱歩邸は昭和九（一九三四）年九月に乱歩が三九歳で、四七軒目に移り住んだ終の住処であり、七〇歳で死去する昭和四〇（一九六五）年七月までの約七一年のうち、三一年間を過ごした家である。乱歩の逝去後は、息子である平井隆太郎が住居として使用していた。主屋は乱歩や子息の代の増改築を経て現在の姿となる。二〇〇二年二月には平井家から立教大学へ敷地及び建物に移管され、現在は立教大学大衆文化研究センターとして一部が公開されている。

現在の建物は主屋「大正一〇（一九二一）年築、昭和三二（一九五七）年：昭和五一（一九七六）年改築」、土蔵「大正一三（一九二四）年築」、洋館「昭和三二（一九五七）年築」、現大衆文化研究センター（旧息子宅）「昭和三二（一九五七）年築、昭和五一（一九七六）年改築」で構成されている。乱歩邸の立教大学への移管に際しては、土蔵についてのみ詳細な調査が行われ豊島区指定文化財となったが、乱歩が手を加えながら暮らした主屋と自ら構想したという洋館についてはくわしい建築的な調査は行われていない

〔写真一・二・三〕。

今回、主屋の小屋裏の調査を行ったところ、主屋は現在までに柱を途中で切断し、切断面から上部を桁ごと持ち上げる改築が行われているため、当初の小屋組と一部の柱がそのまま残っていることがわかった。また洋館は乱歩自身が方眼紙に図面を描き、構想を練ったとされており、乱歩と建築・都市との関係を考える上でも重要な建物であり、乱歩自身が社交の場として利用していた応接間を含め建物全体が乱歩に関わる貴重な文化財であると考えている。

乱歩邸の主屋と洋館については『旧江戸川乱歩邸土蔵保存修理工事報告書』および、平成一六(二〇〇四)年に開催された「江戸川乱歩と大衆の二〇世紀展」のパンフレット「甍の幻影城」が概要を示しているが、先述の通り建築史的な調査は行われていないため詳細は不明であった。また、立教大学が作成した現状図面が敷地全体の平面図のみ存在するが、現状と一致しない箇所も多いため、今回の調査ではこうした先行する成果を参照しつつ、改めて主屋と洋館の実測を行っている。今回の調査では洋館の小屋裏から「昭和三十二年六月七日 平井家」と記載された幣串が発見され、洋館の上棟の

時期が明らかになった「写真四」。また乱歩が洋館建設時の領収書等の関係書類を保存していたことから、今後は建物建設の経緯を明らかにすることができよう。

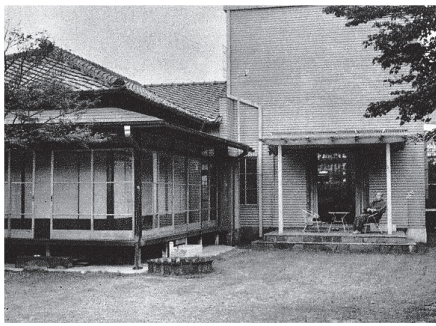
『貼雑年譜』などから乱歩とその家族の生活史の一部が明らかになり、また乱歩のお孫さんから生活史を聞き取ることで、どのような暮らしが営まれ、それに関係して家屋がどのように改変されていたのかを読み解くことが可能となる。また洋館については、建設の背景と乱歩の設計への関与の実際を示し、実測調査から現状の洋館建築の特徴を明らかにすることができよう。

他方で、乱歩は戦中期に隣組の防空群長となり、乱歩邸周辺の家屋の平面図と防空設備を図化しており、民防空の実態を検証できる事例として都市史研究としても重要な対象になる可能性がある。今後の課題として調査を進めていきたい。

(東京理科大学)



写真二…昭和三十三年の改築後の玄関と洋館
(出展「江戸川乱歩「自宅増築記」太平住宅株式会社雑誌「住」の昭和三四年一月号、
『貼雑年譜』第七巻一六〇頁所収)



写真一…洋館と主屋を庭から見る。主屋に縁側が回っていることがわかる(出展「同前」)



写真三…現状の洋館と主屋を庭から見る



写真四…洋館の幣串